

東日本大震災と原発事故後の現状と障がい福祉②

はらまちひばりワークセンター
前施設長 青田直喜

1. あの日の記憶から

(2014.12 静岡県講演原稿から)

平成23年3月11日(金)午後2時46分。東日本大震災発生。

マグニチュード9.0。最大震度7。東北太平洋沿岸(岩手・宮城・福島が特に強く)に津波発生。最大波高30m(主に3波になって6km先まで浸水)により沿岸地区大被災となる。

県内では、津波による死者3,602人行方不明者3人(2014.10月現在)

被災による被害は多方面、多岐に渡るため天文学的数字になる。

更なる東電福島第1原発事故の影響により、予想だにしなかった水素爆発事故により、緊急危険避難地区として、当地区エリアが今もまだ収束の見えない厳しい選択を強いられ、非情な人生航路の始まりとなった。

特に地震、津波、原発、避難、風評の連続して起こった出来事は、生きる希望と夢をも奪ってしまった日々の暮らしには言葉での表現はうまく言えない悔しさがある。

私共の住む南相馬市は、震災当日まで71,561人の住民が居住していた。

震災・津波による死者は、隣接する相馬市と合わせると1,000人を超え、県内では、計1,900人余りの命が奪われた。また、その後引き起こった東電水素爆発事故による緊急避難がとられたことにより、約20万人に指示がで、その避難途中あるいは避難先で亡くなった方(関連死)が南相馬市だけで447人、県内合わせると1,774人と地震、津波同等数に至っている。

子どもから高齢者、要援護者、障がい者等々、中には自殺された方々も含まれる。

一時10,000人に住民が減少した。(現在は、63,700人までなっている)

しかし、この数字は近隣町村の避難者が仮の住居として仮設等で移住していることもあり、正規の数は掴みきれていない現状である。

県内はもとより、全国に転居(散っている)している方々は県全体で、約12万人(26'10現)。3年の経過により現実的な住民意識も出て来ており、「もう決断をしないとイケない」「真に受け止め、人生(生活)を見つめないといけない」等々、重くのしかかっている思いを気丈に見つめている。住所を本市よりぬいて行く方々が次第に出て来ている。

高齢化率33%。子どもたちの帰還は半数に至らず、当然若い人、お父さんお母さん若い方々減少。戻っている方々の多くは、高齢者(自宅があるから、土地があるから)が当然多くなり、家族は割れてしまっている。

1. 現地の嘆きから

○今もなお3年経過して、回避できない処理能力の現実に悩み、諦め。

○事故の不具合を小出しにして、取り繕っている会社報道に不信感大。

○帰還の解除は住民が住める条件もない中での発信に怒り。

○報道(マスコミ)も、「あ～またか」の繰り返しにしらける。

○原因調査中の決まり文句の繰り返しに諦め。

○一方ではごみ処理、廃棄物処理もままならぬのに再稼働への施策の声にやり切れない気持ちを抑える。
(原発再稼働等とはなにごとか!!)

○未だ消えない「この福島原発事故で亡くなった人はいない」という論理。 ふざけるな。

○風評被害へのつらさ。

3. 被災地の福祉の現況

(1)地域の障がい者関係状況

○精神疾患者の増加(ストレス、社会構図の変化によって引き起こされる)

○避難による家族が分離され、要援護の必要性が高まる。

○変化したコミュニティの中で適応できない方々が浮いている。

○最も重要なライフライン、ライフサイクルが欠落してくることで、困窮者、生活困難者が増える。

○利用できる手段が十分とれていない。

4. 事業所の抱える問題と課題(障がい関係を主として)

地区52あったサービス事業所の約8割は何らかの形で再開されるに至った。しかし、元々の開設した地区とは違い、避難先となった地区での再開が多い。

また新しく、精神関係、児童関係等での新しく立ち上げた事業所もある。

重度、高齢者、困窮者等が増してくることにより、関係する福祉サービス支援が対応不足になり困っている現状である。

○生活介護サービス支援

【3頁に続く】

今年もエアーで豆まき



例年 2/3 が節分ですが、今年の節分はいつもより 1 日早い 2/2 になり実に 124 年ぶりの節分でした。ひばりでもコロナ禍の中、豆は使わずエアー、つまり空気で豆をまいたつもりの動作で鬼退治をしました。そして最後は甘納豆をほおばり皆で健康を願いました。



2・26 のもう一つのお楽しみはうどんセットをはじめ唐揚げ、豚カツ、お寿司などのメニューからお好きなお弁当を選べた上、プリンやコーヒーマシーンのデザート付きの豪華版の昼食でした。コロナ前は毎月働いたお給料日の翌日は社会勉強とともに自分に対する御褒美の意味合いもある外食はどなたも楽しい行事でしたが早く戻って欲しいです。

2月のお楽しみ会は工作

2月のお楽しみ会は12日工作貯金箱づくりに挑戦しました。内容はダンボールハンドクラフトの動物貯金箱で、今年の干支「ウシ」が選ばれ、のりもハサミもいらさないで組み立てるだけの簡単に出来る上、優れ物です。百円硬貨なら七千円、五百円玉なら二万五千円も



お弁当の食卓

貯まるというから驚きです。皆さん真剣に取り組まわったという間に完成です。お金はお足とか言われませんが無駄使いをせずこの貯金箱で貯蓄に結び付くといいですね。

歯磨きセットを袋に

法人では様々なコロナ対策を実践中ですが、3/8 から歯磨き用の歯ブラシや歯磨き粉をコップに入れて棚の上に置いてのを、今回清潔な袋入れに改善しました。



学校では既に袋化をしており、それにあやかっ次第です。

職員のメンタル研修会



3/5 県社協主催メンタルヘルス研修は動画配信と言う事で全職員が参加、日頃の対人関係や多忙な業務等からストレスを感じやすい環境下の対処法を学びました。

緊急時の備えについて

私達が生活をする上では危険が隣り合わせです。例えば利用者が転んで大けがになったり、急な病気が起きたり、交通事故に遭ったり色々なケースが考えられます。ひばりでは各種マニュアル集を作っている外「緊急連絡カード」も備え万全です～



災害時の情報について

災害はいつどこで起きるのかわかりません。その為、最小限に防ぐ為にも日頃から備えが大切になります。先頃の新聞によれば平成23年の東日本大震災の地震を受けて保育園や学校から保護者に引渡された後、津波で犠牲になった園児や生徒は300人以上だったという。また障がい者のアンケートでは国や自治体の対応が不十分と感じた人が80%に上り、避難所での配慮が足りなかったり、情報不足を理由だったようです。今回私達は本号6頁に組んだ非常災害対応マニュアルにはいざという時、たとえ保護者と連絡が取れないとしても、ひばりではこうしている状況や連絡網を示したものです。そこでひばりでは、今後更に一歩進んだ「ライン」とか「メール」等を活用出来ない検討中です。個人情報に配慮しつつ希望する方々宛てにひばりの安否情報を提供したい考えでありますが、皆様のご意見等をお寄せ下さい。

ひばりからのご提案